

平成23年1月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町1-684 Tel0428-23-6859）

## 減少する冬の野鳥

寒さが厳しい冬期、暖かく水と食べ物の確保できる市内の丘陵地帯は、冬越しをする鳥たちが、越冬地として利用します。雑木林の林縁、沢や湿地に沿う草むらには、スズメやホオジロだけではなく、冬になると姿を見せるカシラダカやマヒワ、アオジ等も群れで集まり冬を過ごします。鳥の数を調べていると、時には数え切れないくらいの群れが、草むらから飛び出すこともあります。勿論、群れを作る鳥だけではなく、モズやジョウビタキなど単独生活をする鳥、タカの仲間などの猛禽類にとっても冬を過ごしやすい場所です。

こうした丘陵地帯に生息する鳥の種類数や個体数を定期的に、一定の方法で調べていくと、その場所の季節による変化のパターンを知ることができます。そして、こうした記録を積み上げていくと、経年的な変化も知ることができます。市内南東部の大荷田丘陵では、1990（平成2）年当時、生息する鳥の種類数や個体数を調べると、全種類合計の個体数は、夏期（繁殖期を含む）よりも冬期（晩秋～早春）の方が圧倒的に多い傾向がありました。冬期の個体数は、夏期の2倍近くになることもあります。夏期（特に繁殖期）は、鳥が雄と雌の番で、ある一定の広さの縄張りを作り生活するのに対し、冬期は縄張りは不要になり、密度の高い群れを作ることが原因の一つでしょう。大荷田の個体数変化は、越冬地としての利用価値の高い季節変化のパターンを見せていました。もっと標高の高い奥多摩の山では、鳥の個体数は夏に多く、冬に減少するというパターンを示します。越冬地としてよりも、繁殖地として利用されている場所の傾向です。

ところが、最近の大荷田丘陵では、「夏に少なく、冬に多い」という変化のパターンが、崩れてきています。冬期に生息する鳥の個体数が減少し、夏期との差が少なくなってきました。例えば、1991年1月と2010年1月を全種類合計の個体数で比較すると、2010年は1991年の半数に満たない数値になります。こうした傾向は、大荷田丘陵だけではなく、市内の小曾木地区の丘陵でもみられます。小曾木地区の厚沢川沿いの1991年1月と2009年1月の記録を比較すると、2009年は1991年の約6割程度に減少しています。夏期の個体数については、大荷田丘陵のみの比較ですが、1990年当時も最近も、多少のばらつきは

ありますが、大きな変化はないようです。そのため、最近の大荷田の個体数変化は、季節による差が少ないパターンに変わりつつあります。

データ量に限りがあり、原因の特定は難しいのですが、最近の暖冬は理由の一つに挙げられそうです。冬が暖かくなると、鳥たちは条件の良い場所に集まらなくても、冬を過ごすことができそうに思います。だとすると、これは個人的な仮説ですが、今まで冬の鳥が少なかった場所で、逆に冬期の鳥が増えているケースがあるかもしれません。

(文責 櫻岡 幸治)